

医療の未来をつくる全国からの声

診療所探訪



親子二代にわたって 地域住民の運動器の健康を守る

2014年8月取材

宮城県仙台市
医療法人あいびー
佐々木整形外科麻酔科クリニック 副院長
佐々木 祐肇 先生

佐々木整形外科麻酔科クリニックは、40年の長きにわたり、地域の医療を支えてきました。開業したのは、院長の佐々木信之先生。今では息子の佐々木祐肇先生（以下、佐々木先生）が副院長となり、親子二人三脚で診療を担っています。地域の患者さんが信頼感を持ち、安心して来院できるクリニックをめざしていると語る佐々木先生のもとには、新たな患者さんはもちろん、院長が診ていた患者さんが引き続き訪れています。

聞く耳を持つことで信頼を獲得

佐々木先生が整形外科を専門にしたのは、院長の影響が大きいのですが、理由はそれだけではありません。研修医時代にさまざまな診療科を見学したとき、整形外科は患者さんの年齢層や疾患の幅が広いことに加え、高齢化により患者数が増加傾向にあるところにやりがいを感じて選んだと言います。勤務医時代を経て、5年前から同クリニックで診療を始めた佐々木先生が、患者さんの信頼を得るためにしているのは、訴えをよく聞くことです。「聞く耳を持つことが、信用の獲得につながるの確かです。私は、患者さんのお話を決してさげすまないようにしています」。



手術を望まない患者さんには神経ブロック療法や薬物療法、そして理学療法などを勧めます。リハビリ室には、牽引やマイクロ波、ホットパックといった治療機器類がそろっています。

保存的治療で高齢者のニーズに応える



受付や待合室、リハビリ室には、ロコモティブシンドローム予防のためのパンフレットやのぼりが掲げられ、クリニックを挙げて、楽しい歌に合わせての“ロコモ体操”普及に力を入れています。

最近、同クリニックの患者さんの多くを高齢者が占め、膝痛、腰痛、骨粗鬆症が増えています。勤務医の頃は手術による治療を積極的に行っていましたが、「当クリニックでの診療では、手術をしない保存的治療の可能性を探り、患者さんに豊富な選択肢を示すようになりました」と佐々木先生は話します。高齢の患者さんは手術を敬遠する傾向が強く、治療結果として、必ずしも完全に元に戻ることを望まない方も多数いるそうです。痛みやしびれがある程度軽減し、少しでも歩けるようになればいいなどと、患者さんが望む治療結果の到達点はさまざま。保存的治療としての神経ブロック療法、理学療法、薬物療法などを組み合わせて、患者さんのニーズに合った治療方法を複数提示し、選択してもらっています。

ロコモ予防の歌や体操の普及にも注力

そして同クリニックが治療と同様に力を入れているのが、運動器の障害により要介護のリスクが高まる“ロコモティブシンドローム”になるのを防ぐための啓発活動です。この概念を日本整形外科学会が提唱する以前から、院長は運動器関連の委員会で活動していました。東日本大震災以降、被災地のロコモ予防支援の中で知り合った歌手、健康運動指導士と共につくったのが、『ロコモかしくもサビないで』という歌と体操です。「当クリニックでも毎朝、歌を流してスタッフや患者さんみんな体操をしています」と佐々木先生は楽しそうに話してくれました。運動器の健康を守り、人生の最後までいきいきと元気な生活をできるように。死ぬまで元気！——親子二代の患者さんへの思いは通じ合っています。



院長の佐々木信之先生は現在、老健施設の理事長も務めながら、ロコモ予防のために各地で講演したり、キャンペーン用CDやDVD、ロコモピブス等のツールを制作したりと活躍しています。